

第157回東京オペラシティ定期シリーズ

10月18日(水) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

第990回サントリー定期シリーズ

10月19日(木) 19:00開演 サントリーホール

第991回オーチャード定期演奏会

10月22日(日) 15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

指揮：クロエ・デュフレーヌ

ヴァイオリン：中野りな\*

コンサートマスター：近藤 薫

10/18

10/19

10/22

リリ・ブーランジェ：春の朝に&lt;リリ・ブーランジェ生誕130年&gt;(約6分)

サン＝サーンス：

ヴァイオリン協奏曲第3番 口短調 Op. 61\* (約27分)

- I. アレグロ・ノン・トロポ
- II. アンダンティーノ・クワジ・アレグレット
- III. モルト・モデラート・エ・マエストーソーアレグロ・ノン・トロポ

— 休憩 (約15分) —

ベルリオーズ：幻想交響曲 Op. 14 (約50分)

- I. 「夢—情熱」
- II. 「舞踏会」
- III. 「野の情景」
- IV. 「断頭台への行進」
- V. 「サバトの夜の夢」

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等創造支援事業(創造団体支援))

独立行政法人日本芸術文化振興会(10/19)

協力：Bunkamura(10/22)



- ♪ 本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。
- ♪ 演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。
- ♪ 曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。
- ♪ 演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。
- ♪ 演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

## 出演者プロフィール



©Capucine de Chocqueuse

指揮

クロエ・デュフレーヌ

Chloé Dufresne, conductor

32歳の若く才能あふれる指揮者クロエ・デュフレーヌは、フィンランド、フランス、ノルウェー、アメリカで重要なオーケストラやオペラ・カンパニーを指揮してきた。オーケストラではヘルシンキ・フィル、フランス国立管、パリ国立管、モンペ

リエ・オペラ座管、ロサンゼルス・フィルなど、オペラではモーツァルト『ドン・ジョヴァンニ』、ベッリーニ『ノルマ』、ブリテン『アルバート・ヘリング』、オッフェンバック『赤いりんご』などをルーアン、トゥーロン、ニース、ロレーヌ国立等のオペラ座で指揮。2022/23シーズンはフランス各地の劇場でドニゼッティ『愛の妙薬』、グノー『ファウスト』、オッフェンバック『月世界旅行』を指揮。2023/24シーズンのハイライトは10月の東京フィルとの日本デビュー、香港フィル、フィンランド放送響、ザールブリュッケン・カイザースラウテルン放送響、ミュンヘン・フィル他とのコンサート、ブルターニュ国立管、モンペリエ国立オペラ管との再共演など。ヴァイオラ、歌唱、合唱指揮を学んだ後、2020年にヘルシンキのシベリウス・アカデミーで指揮の修士課程を修了。M.フランク、P.ヤルヴィ、リントゥ、ジンマン、アデス、マルッキのマスタークラスを受講し、オラモ、ドゥダメル、ティルソン・トーマス、サロネンの副指揮を務め、ルツェルン音楽祭とロサンゼルス・フィルの指揮者フェロー・プログラムを修了。

2021年、若手指揮者の登竜門であるマルコ指揮者コンクールとブザンソン国際指揮者コンクールの両方に入賞し、2022/23シーズンのロサンゼルス・フィルのドゥダメル・フェローに続き、2023/24シーズンはドゥダメルの招きによりパリ・オペラ座アカデミーのフェローに選ばれている。

10/18

10/19

10/22

10/18

10/19

10/22



©kisekimichiko

ヴァイオリン

## 中野りな

Lina Nakano, violin

2004年生まれ。3歳よりヴァイオリンを始め、桐朋学園大学音楽学部附属子供のための音楽教室にて森川ちひろに学ぶ。2015年よりザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学夏期国際音楽アカデミーにてポール・ロチェックの指導を受ける。2023年4月より桐朋学園大学「ソリスト・ディプロマ・コース」及び、9月からはウィーン市立芸術大学にも在学。現在、辰巳明子、カルヴァイ・ダリボルに師事し研鑽を積む。ローム ミュージック ファンデーション2023年度奨学生。

2018年第72回全日本学生音楽コンクール(中学校の部)優勝。2019年第3回若い音楽家のためのモーツァルトコンクール(中国・珠海)優勝。2020年第7回アリオン桐朋音楽賞受賞。2021年第90回日本音楽コンクール優勝。併せて岩谷賞、レウカディア賞、鷺見賞、黒柳賞、増沢賞を受賞。2022年第8回仙台国際音楽コンクールにおいて、史上最年少の17歳で優勝、及び聴衆賞を受賞し大きな注目を浴びる。以降、主要オーケストラとの共演やリサイタルなど活動を広げ、高い評価を得ている。

使用楽器: 一般財団法人ITOHより貸与されている1716年製のアントニオ・ストラディバリウス。

## 楽曲紹介

解説=永井玉藻

クラシック音楽の世界で「フランスの作曲家」を問うと、真っ先に名前が上がるのがドビュッシーとラヴェルの二人だろう。しかし(当然ではあるが)、「フランス音楽」はこの2人の作品のみに代表されるわけではない。10月定期で演奏されるのは、20世紀初頭の革新的な気風の中を駆け抜けていったリリ・ブーランジェ、「古典的フランス精神の代表者」と言われるサン＝サーンス、そして管弦楽法の鬼才・ベルリオーズの作品である。今月は、19世紀から20世紀にかけて大きく発展したフランスの器楽曲の多面性を、期待の俊英の演奏でじっくりと楽しめる、「芸術の秋」ならではのプログラムである。

### リリ・ブーランジェ 春の朝に

「早熟かつ早世の天才」「女性初のローマ大賞受賞者」。19世紀後半から20世紀前半のフランスに生きた作曲家たちの中でも、今年生誕130年を迎えたリリ・ブーランジェ(1893-1918)を彩るフレーズは、とかくドラマティックである。

フランスの作曲家のプロフィールにたびたび登場する「ローマ賞」とは、作曲家を志す若者の登竜門とされるコンクール。応募資格は29歳未満の独身フランス人であったが、20世紀初頭はまだ「作曲家=男性の職業」との考え方が一般的な時代で、賞に挑戦した(できた)のも男性が圧倒的多数だった。その中でブーランジェは1913年に、19歳の若さで大賞、つまり第1位を勝ち取る。しかもその受賞は、2歳の時から苦しんだ免疫疾患の病軀を押してのものだった。

「春の朝に」は晩年の作品の一つで、同じくローマ大賞受賞者の父、エルネストに捧げられている。ヴィオラ以上の弦楽器によるスタッカートに支えられてフルートが奏するのが、楽曲に繰り返し登場する中心主題。ときおり金管楽器や打楽器が盛り上がりを見せるものの、全体としては弦楽器と木管楽器が主体となる。春の不安定な天気を思わせつつも、軽やかさに満ちた作品である。

[作曲年代] 1918年 [初演] 1921年3月13日、パリ音楽院にて、レーヌ・バトン指揮コンセルヴァトワールの演奏による

[楽器編成] ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、打楽器(小太鼓、トライアングル、サスペンデッドシンバル)、ハーブ、チェレスタ、弦楽5部

## サン＝サーンス

### ヴァイオリン協奏曲第3番 □短調 Op. 61

ブーランジェのローマ大賞受賞の際、彼女の才能には、若手から重鎮に至るまで多くの作曲家が驚嘆した。その一人が、選考の審査員でもあったカミーユ・サン＝サーンス(1835-1921)である。晩年には保守的な作曲家とみなされ、激しいパッシングも受けたサン＝サーンスだが、オペラが「第一」のジャンルとされていた19世紀のフランス音楽界において、彼は特に交響曲の発展に尽力したことで名高い。また、ヴァイオリンを独奏とする協奏曲のジャンルでも、今日のレパートリーとなる作品を複数残した。2021年には没後100年を迎えたこともあり、フランスでもサン＝サーンスをテーマとした展覧会や学会が開催されるなど、生涯やこれまで着目されなかった作品にも、改めて光が当てられ始めている。

ヴァイオリン協奏曲第3番は1880年に完成し、初演時には作曲家の友人でもあった名ヴァイオリン奏者、パブロ・デ・サラサーテ(1844-1908)がソリストを務めた。ソナタ形式の**第1楽章**では、オーケストラの短い序奏に続いて、独奏ヴァイオリンがG線(ヴァイオリンの最も低い弦)上で力強い第1主題を提示する。長調の第2主題も独奏ヴァイオリンが奏するが、こちらはのびやかで歌唱的。**第2楽章**は穏やかな8分の6拍子の三部形式で、コーダの独奏ヴァイオリンのフラジオレット(弦を強く押さえつけず、軽く触れて倍音を出す奏法)とクラリネットによるアルペジオが聴きどころの一つである。**第3楽章**は打って変わって情熱的な独奏ヴァイオリンのソロから始まり、きびきびとしたリズムの第1主題と穏やかな第2主題、コラル風の主題の対比とともに、一貫して独奏ヴァイオリンの華やかな技巧が展開される。

[作曲年代] 1879～80年 [初演] 1880年10月15日、ハンブルクにてパブロ・デ・サラサーテの独奏による

[楽器編成] フルート2(2番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部、独奏ヴァイオリン

## ベルリオーズ 幻想交響曲 Op. 14

「彼はなんでも知っている。でも彼には十分な経験が欠けている」。1864年に、サン＝サーンスが二度目にして最後のローマ大賞への挑戦に失敗したとき、ベルリオーズ(1803-1869)はこう述べたという。そのベルリオーズ自身も1830年に4回目の挑戦で大賞を得たのだが、その年に作曲されたのが『幻想交響曲』だった。

現代の日本風というなら、この作品は、作曲家の「推し活」がこじれにこじれた結果の産物である。1827年、ベルリオーズはパリのオデオン座に出演していた女優のハリエット・スミスソン(1800-1854)に強烈な恋心を抱いた。彼は舞台に通い詰め、スミスソンに手紙も出すが、一介のファンと「推し」との距離は縮まらない。ついには「大規模な曲を書けば、彼女が振り向いてくれるのでは?」という大胆な発想に至るものの、最終的にベルリオーズは別の女性との恋愛に落ちていた。

『幻想交響曲』は、その新たな恋愛の最中に書かれた作品で、「ある芸術家の生涯についてのエピソード」の原題がある。5つの楽章にはそれぞれ標題が付いており、さらに1845年に出版された楽譜には、作曲家自身による解説が付加された。

ちなみに『幻想交響曲』の発表後、またも恋に敗れたベルリオーズは、1832年にスミスソンと再会し結婚。ただし、二人の生活は長続きしなかった。作曲家が恋心を抱いたのは、スミスソン本人に対してだったのか、それとも「理想の女性」像に、だったのだろうか。



ハリエット・スミスソンの肖像(ジョージ・クリント作)  
ベルリオーズはパリのオデオン座でシェイクスピア『ハムレット』を観劇し、オフィーリアを演じたスミスソンに恋心を抱いたという

**第1楽章「夢一情熱」:** ゆったりとした序奏部ののち、主部に入ってから第1ヴァイオリンが奏するのが、「恋人」の旋律。この旋律は作品を通して繰り返し登場し、さらに状況に応じて変形されて用いられる。

**第2楽章「舞踏会」:** ワルツの3拍子が華やかな楽章。ハーブが大活躍し、フルートとオーボエが「恋人」の旋律を奏する。

**第3楽章「野の情景」:** イングリッシュ・ホルンと舞台裏に配置されたオーボエによる「羊飼いの歌」が、のどかな田園地帯の夏の夕べに響く、穏やかな楽章。最後は4つのティンパニによって雷鳴が描写される。

**第4楽章「断頭台への行進」:** 夢の中で恋人を殺害した芸術家が、行進曲と共に断頭台へ向かう。「恋人」の旋律は途中で断ち切れ、劇的に楽章が終わる。

**第5楽章「サバトの夜の夢」:** 分割された弦楽器の不気味な半音階に続き、装飾音符で変形された「恋人」の旋律が加わる。グレゴリオ聖歌「怒りの日」と共に弔いの鐘の音が鳴り、弦楽器の特殊奏法も登場するなど、聴きどころ満載の楽章。

【作曲年代】1830年 【初演】1830年12月5日、パリ音楽院にてフランソワ・アブネックの指揮による

【楽器編成】フルート2(2番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2(2番はイングリッシュ・ホルン持ち替え)、クラリネット2(2番はエス[E♭]・クラリネット持ち替え)、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ(2名)、打楽器(小太鼓、大太鼓、シンバル、鐘)、ハーブ2、弦楽5部 【バンド】オーボエ

ながいたまも/パリ第4大学博士課程修了、博士(音楽学)。専門は西洋音楽史(特に19~20世紀のフランス音楽、バレエ)。現在、慶應義塾大学、白百合女子大学などにて非常勤講師を務めている。2023年1月に『バレエ伴奏者の歴史 19世紀パリ・オペラ座と現代、舞台裏で働く人々』(音楽之友社)を出版。毎日新聞書評欄など各種メディアにて取り上げられ、発売から6ヶ月で重版となっている。